おにぎり・おむすび・焼飯
―江戸時代の俳諧資料から―

母利司朗

はじめに

穎原退蔵が昭和十九年に発表した「食事に関する言葉の二三」（『学海』第一巻第二号・第三号　注1）は、いわゆる学術論文として書かれたものではない。しかし、その内容は、何気ない日常的な食に関わる言葉である「弁当」の意味するところを古俳諧から渉猟し帰納法的に説き明かしたものであり、きわめて質の高い、また興味深い論文である。

穎原の論文は、古俳諧における「弁当」の用例からスタートし、「弁当」が簡便な携帯用の食事であることに説き至った後、「弁当」同様のものとしての今日でいういわゆる「おにぎり」「おむすび」の類に触れながら、最後はほとんど死語となってしまった「手のくぼ」という「おにぎり」の別語についての膨大な例証の引用で論を締めくくっている。

食に関することを調べるには、料理本などの直接料理に関する文献を見るのが一般であり、かつ有効であるが、食に関する「言葉」ということで言えば、江戸時代の俳諧資料は、それを凌駕して余りある質と量を備えた宝の山であった。穎原はそのことにいち早く注目した第一人者であった。

ところで、穎原がこの論文の中でわずかに触れた「おにぎり」や「おむすび」については、今日様々な関心からウェブ上で多種多様に触れられ、具材豊かな「おにぎり」「おむすび」を紹介した実用的なページも少なくない。しかし、それらを史的にとらえた先行研究ということになると、一般向けに書かれた増淵敏之『おにぎりと日本人』（洋泉社・二〇一七）、そしていわゆる「おにぎり」的なものの日本における考古資料の紹介を中心とした『おにぎりの文化史　おにぎりはじめて物語』（横浜市歴史博物館監修・河出書房新社・二〇一九　注2）が有益で興味深いものとしてあげられる程度にすぎない。ただ、両書においても、記述の根拠となる文献への言及は乏しく、人々の関心の多様さと大きさに鑑みれば、「おにぎり」「おむすび」についての歴史的な研究はあまり進んでいない。

筆者は、穎原が論文の中で本格的には触れることのなかった「おにぎり」と「おむすび」、さらにそれらと関連する「焼飯」という三つの言葉について、江戸時代の俳諧からその用例を拾いだし、三者の歴史的な関係を「言葉」のレベルから明らかにしようと試みているとこ

ろである。本稿では、その中間報告として、現段階で調査しえた俳諧資料における用例の紹介を中心としながらあらあらとしたスケッチを記したい。

一　おにぎり

「おにぎり」と「おむすび」という言葉を歴史的に辿る出発点として、まず『日本国語大辞典　第二版』に立項されている言葉の説明を見てみよう（注3）。

まず「おにぎり」。

お‐にぎり【御握】〔名〕（「お」は接頭語）

（1）自分の手をにぎりしめることをいう幼児語。（省略）

（2）握飯（にぎりめし）をいう丁寧語。おむすび。もと、女性・子供の語。

＊薄明〔1946〕〈太宰治〉

義妹の置いて行ったおにぎりを頬張った

＊曠野〔1964〕〈庄野潤三〉六

リュックからお握りを出して食べた

語誌

（1）古くは「にぎりいひ」と呼ばれていた。材料となる「御飯」が、上代の「いひ」から中古の「こはいひ」を経て、中世には「めし」と呼ばれたように、「おにぎり」も、「にぎりいひ」から「にぎりめし」を経て生じた名称であろう。

（2）地域的には、西日本では「おにぎり」「にぎりめし」が優勢、東日本では「おむすび」「むすび」が優勢。東京でも古くは「おむすび」で、「おにぎり」は、上方から比較的新しく入ってきたことばが広まったもの。

「語誌」において、（1）では歴史的、（2）では地理的視点から、「おにぎり」という言葉が説明されるが、「「おにぎり」も、「にぎりいひ」から「にぎりめし」を経て生じた名称であろう」という説明が具体的にいつの時代をさすのかが不明である点や、東西での違いを説明する中での「古くは」や「新しく」もまた、具体的にいつの時代をさすのかが不明である点が、この言葉の説明としては難点である。

「語誌」（1）で説かれる、「にぎりいひ」→「にぎりめし」→「おにぎり」という言葉の変遷のうち、「にぎりいひ」については、すぐ後で引用するように、俳諧では「握り飯」「握飯」「にぎり飯」などのルビのない漢字表記の資料が大半で、少なくとも明確に「にぎりいひ」と判断できるものは見つけることができない。

「にぎりめし」については、『日本国語大辞典　第二版』が次のように記している。

にぎり‐めし【握飯】〔名〕

握り固めた飯。形は丸形や三角形などで、中に梅干、鮭などを入れることが多い。むすび。にぎり。にぎりいい。

＊浮世草子・新色五巻書〔1698〕二・一

風呂敷よりにぎり食の昼食喰しもふとはじまり

＊浄瑠璃・曾我会稽山〔1718〕一

朝比奈が握り拳のにぎりめし、喰らふて見よ

＊随筆・守貞漫稿〔1837～53〕二八

にぎりめし〈略〉今世は掌に塩水を付て握」之、三都とも形定なし

同書では、元禄十一（一六九八）年刊行の浮世草子『新色五巻書』中の「風呂敷よりにぎり食の昼食喰しもふとはじまり」を早い時期の用例として引用するが、管見に入った俳諧の用例には、「にぎりめし」と読む可能性のあるものとして、その時期を遡る次のようなものがみつかった。

あそびずきの心は鳥の玉子なり
　にぎり飯にて狩暮す友　　長治
（『境海草』万治三〈一六六〇〉年刊）

飯だこやをのが手づから握飯　　同（大坂）寛貞
（『糸屑集』延宝三〈一六七五〉年序刊）

其後合戦旅立の雲　　西国
高麗の内をまるめてにぎり食　　同
終に目馴ぬ昼前の山　　同
（『見花数寄』延宝七〈一六七九〉年刊）

握り食楢のかれ葉に包添　　同（政）
霰丸じて軒にたばしる　　風（『中庸姿』同年刊）

仏の会座によう喰のを握　　平
花は空異香薫じて胡麻塩ふり　　子
春波けたて、□吟ずる　　平
（『大坂みつがしら』延宝九〈一六八一〉年序刊）

最も早い用例である『境海草』では、前句の「鳥の玉子」から付句の「にぎり飯」が連想されているが、これは、室町期に描かれた有名な『酒飯論絵巻』にも描かれている卵形（楕円形）の「鳥の子にぎり」と同じものをさしていると考えられる。『酒飯論絵巻』の成立した場は京都。『境海草』所収句の長治は堺の作者である。少なくとも室町から江戸初期の上方では、卵形の「にぎりめし」が一般的であった可能性が高い。『糸屑集』の「飯だこ」の見立ても、卵型の「にぎりめし」を背景にした見立てであろう。また、「まるめ」（『見花数寄』）、「霰丸じて」（『中庸姿』）という俳書に見える言葉からは、まん丸か卵型かの差異が不明ながら、上方の「にぎりめし」が、

下冷て来る臥勢の腹
　三角な飯を角ミから喰かゝり
（『俳諧桃八仙』宝暦八〈一七五八〉年刊）

というような三角形ではなかったことを示している。

また、

人なみや我等も花の握りめし　　雲水　瓜坊
（『花供養』天明七〈一七八七〉年刊）

若草や握り飯喰ふた紙の殻　　素英

（『齢の華』文政十二〈一八二九〉年刊）

楫に仕立る樫の寸法　叟
有明に旅籠の外の握り飯　然

（『己之中集』天保五〈一八三四〉年刊）

岩間をめぐる水の清らか
平山もにぎり飯には香のもの

（『露錦句帖』天保十〈一八三九〉年成）

腰は曲れど松は常盤木　静
鷹狩の得ものをそこに握り飯　後
気転が利いて喜伝次とやら　静

（『二度のかけ』文久二〈一八六二〉年写）

などの俳諧における「花（花見）」、「若草」、「旅籠（旅籠飯）」、「岩間」、「鷹狩」といった言葉は、江戸時代における「にぎりめし」が、野外での簡便な食事、携行食であったことを示している。「にぎりめし」は「紙」で包まれることもあったろうし、一緒に添えられた「香のもの」も楽しみのひとつであったろう。

肝心の「おにぎり」という言葉については、今までのところ、これを詠んだ江戸期の俳諧を見つけることができていない。「おにぎり」という言葉の初出は明治以降の近代にまで繰り下げる必要があるのであろうか。また、「お」をとった「にぎり」という言葉（そのような言葉が使われていたかどうかは不明）も単独のかたちでは見つけることができていない。

二　おむすび　付・焼飯

ついでもう一つの「おむすび」という言葉について触れてみよう。冒頭にあげた穎原の論文の中に、次のような一節がある。

本来簡便を主とすべきであつた弁当が、こんな風にもつぱら行楽用のものになつてしまふと、実際遠足旅行などの際に携へる阿部対州持参のやうな焼飯は、もう弁当といへなくなつてくる。そのためかどうか、一方でさうした簡素な食料として握飯または結び。といふ言葉が見えてくる。握飯や結びの名称もあるいは室町末期ぐらゐまでは遡られるのかも知れないが、管見では、

田夫野人花にやどれり握りめし　松淡子

（延宝年間、功用群鑑）

焼めしもむすびといへば亦やさし（附句）　心友

（延宝八年、江戸宮笥）

むすひ飯（イヒ）梢の露のこぼるゝは（附句）　如風

（延宝九年、七百五十韻）

等とあるのがまづ古い。『守貞謾稿』二十八には「にぎりめし古はとんじきと云、屯食也。今俗或はむすびと云、本女詞也」とあつて、三都の握飯の形などについて説いてゐる。結び は確かに女詞であらう。おむすびの名は優しいながらに、その簡素質実な点で握飯は全く日本的な食品である。近松の『国性爺（ママ）合戦』に

描かれた和藤内の母は、志那料理のさまざまな珍味を侑められても、結局「ついむすびをしてくれ」とねだらずにをれなかつた。

「簡素質実」な食料としての「にぎりめし」「むすび」「むすび飯（いひ）」という言葉が、遅くとも江戸時代のはじめには使いはじめられていたことが指摘されている。「お」を接頭語とするならば「むすび」は「おむすび」のこととなる。

『日本国語大辞典　第二版』では、「むすび」「むすび飯（いひ）」という言葉は立てられず、「おむすび」と「むすびめし」が、

お-むすび【御結】〔名〕（「お」は接頭語）

「にぎりめし（握飯）」を丁寧にいう語。

＊雑俳・柳多留-一二六〔１８３３〕

おむすびのほどけたを喰ふ居候

語誌

（1）「むすび」は「むすぶ」の名詞形で、「むすぶ」は「印をむすぶ」「（手を）むすんでひらいて」などのように、てのひらを閉じる意に通じ、飯について「にぎる」にあたるが、動詞としての用例は見られない。

（2）地域的には、東日本は「おむすび」、西日本は「おにぎり」であるが、最近は「おにぎり」が一般的呼称になりつつある。

むすび-めし【結飯】解説・用例〔名〕

飯を両手で握り固めたもの。にぎりめし。むすび。

＊明治大正見聞史〔１９２６〕〈生方敏郎〉政府の恐露病と日露戦争・一〇

むすび飯の米は氷って針の如くといふやうな愚痴が出はじめた

として立項される。「おむすび」の早い使用例は天保四（一八三三）年刊行の『誹風柳多留』百二六篇所収の句。「むすびめし」の早い例は一九二六（昭和元年）の『明治大正見聞史』とする。穎原の引用した「むすび」「むすび飯（いひ）」は、それらをはるかに遡った時代の使用例である。

管見に入った俳諧資料の中では、「おむすび」という語形で、

笈摺の伊達はめでたく思はれて　紀水

結ぶの神の前でおむすび　紀鳴

（『江戸にしき』宝暦九〈一七五九〉年刊）

という比較的早い時代の使用例が見いだされた。

「おむすび」「むすび」について注目すべきは、穎原の引用した二句目の、

焼めしもむすびといへば亦やさし（附句）　心友

という句であろう。

この「焼めし」は、むろん現在の炒飯（チャーハン）のことではない。『日本国語大辞典』が、

やき-めし【焼飯】〔名〕

（1）「やきむすび（焼結）」に同じ。

＊続撰清正記〔１６６４〕六・清正鎧の事

腰に白米一升・焼飯・塩、少しうちがひに入れて

＊黄表紙・這奇的見勢物語〔１８０１〕

せなかにはやきめしのやうなうろこがたのこけがしゃうじ　（『誹枕』延宝八〈一六八〇〉序刊）

と記す「やきむすび」のことである。

「やきむすび」について、『日本国語大辞典』は、

やき‐むすび【焼結】〔名〕

握り飯に塩、醤油、味噌などをつけて焼いたもの。焼飯。焼握り飯。

＊北の河〔一９６５〕〈高井有一〉

弁当はこの地方で焼結びと呼ぶ焼いた握飯が二つ

と、早い使用例として昭和四十（一九六五）年の小説をあげるが、先ほど述べた「にぎりめし」に味付をして焼いたもの、という。「やきめし」と言うとあまりに即物的で下卑た印象を受けるが、それを「むすび」と言うとなにかしら上品に聞こえる、というのであろう。

興味深いのは、当時広く使われていた言葉である「にぎりめし」を焼いたのであれば「やきにぎり」とでも言えばよいものを、「やきむすび」と言っていることである。「おむすび」には、「むすび」という短い語形と「むすびいひ」という長い語形の両方があったが、「おにぎり」には、「にぎりいひ」「にぎりめし」という長い語形はあるものの、なぜか「にぎり」という短い語形の使われていた形跡がない。

この「やきめし」と「むすび」（むすぶ）の言葉の関係については、さらに次のような句例も参考になるであろう。

焼食や誰岩代にむすびけん　幽山

反古につゝむ山本の雲　素堂

弓杖に東野州のかたぶきて　来

焼めしむすぶとばかりの塩　同

（『東風流』宝暦六〈一七五六〉年刊）

『誹枕』の「むすび」は、

有間皇子自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

岩代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへり見む

家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

（『万葉集』巻二・一四一、一四二）

を踏まえるが、二例ともに、「むすび」「むすぶ」を、「やきめし」を「むすぶ」、という形の動詞として用いている。「やきめし」を拵える、というほどの意味であろう。基本的に、「やきめし」は「にぎりめし」を焼いて味付けしたものである。江戸時代の人々の感覚や思考、文物を知るために重宝な『俳諧類船集』（延宝四〈一六七六〉年刊）には、「握」から「焼めし」が付合語として連想されており、「むすぶ」からは連想されていない。実際の句にも、

変化とりに参る牢人　宅

夜の雨焼食二ツにぎらせて　角

（『花摘』元禄三〈一六九〇〉年刊）

のように、「やきめし」を拵えることを、「やきめし」を「にぎる」、と言う。しかし、「にぎりめし」を焼いた「やきめし」を「にぎる」という言葉は、「頭痛が痛い」のような重言であり、その使い方のおかしさを避けるために、別に、「むすぶ」という言葉を多く用いたの

ではないだろうか。むろん、なぜ「むすぶ」という言葉を用いたのか、という疑問は残るが、紐を結んだりする「むすぶ」手の形が心なしか「にぎりめし」を作る「にぎる」手の形と似ていることが、その背景にあったのかもしれない。

「やきめし」と「にぎりめし」の関係を右のようにとらえれば、次のように江戸時代を通して数多くの俳諧を拾うことができる。

焼めしもありこめつぶもあり　安静
籠り人の帰りしあとの神社
（『鉋屑集』万治二〈一六五九〉年刊）

焼食のかほりやふかき月の朝
鰯をいれし旅のわらづと　存朱
（『伊勢俳諧長帳』寛文年間以前成）

松吹やうつぶし染の昼寝すぎ　和推
二里の飛脚か焼食は無理　豆人
（『余花千句』宝永二〈一七〇五〉年刊）

ほどがやの中ほどに武蔵相模の境ありて、坂有。焼もち坂と所に呼り。此所にて始ての旅人こは飯を喰ふなりといひならはせり。
こは飯を今蒸花や翁草　全角

焼飯の一半黄也国境　立志
（『芋の子』正徳五〈一七一四〉年刊）

弥がうへに積かさねたる普請小屋　遊之
焼飯にたかる蝿あふぎやる　杜蘭
（『梅雨の後』宝暦二〈一七五二〉年刊）

焼飯でうき世をまはる夏念仏
榎に晴らす雨の獅子舞
（『紅葉』宝暦四〈一七五四〉年刊）

峠迄受合駕も昼下り
女房の力焼飯で喰ふ　同（武州騎西）五仙
（『俳諧連理香』宝暦十一〈一七六一〉年刊）

草鞋も買ふた時は珍らし
焼飯を腹の礫に持て行　同（八日市）陸浮（同）

喰割し焼飯みせん土俵入
（『八題集』明和五〈一七六七〉年頃刊）

門までゆけば楽のはじまり　禾
焼めしを面々の腰につらくりて　翠

（『花供養』享和二〈一八〇二〉年刊）

焼飯を不掃除な手に振舞て
体も汐の辛い船頭　同（東武　李北）

（『やまかつら』文化十二〈一八一五〉年刊）

焼めしを喰々越るかれ野哉　其山

（『石海集』嘉永七〈一八五四〉年刊）

呼声を野飼の駒のよくしりて　伍
焼めしわれば梅干の出る　川

（『およびごし』文久一〈一八六一〉年刊）

「にぎりめし」同様に、「旅」「草鞋」「野飼の駒」「籠り人」など、家での食事ではない外での食事、とくに旅中での食事を思わせる言葉と一緒に詠まれたり、「船頭」「普請小屋」など、肉体労働の人々の野外での食事を思わせる言葉と合わされて詠まれていることがわかる。

おわりに

頴原退蔵は、「食事に関する言葉の二三」の中で、「おにぎり」あるいは「おむすび」と言われている身近な食について、それを「おむすびの名は優しいながらに、その簡素質実な点で握飯は全く日本的な食品である。」と語った。それから八十年近くがたった今日の、「おにぎり」「おむすび」についての多種多様な言説であふれるウェブ上の記事を見てみても、たとえば次のようなものに出会う。

幼いころの遠足や運動会で頬張って食べたおにぎりに「おふくろの味」の記憶を重ねる人は多いのではないでしょうか。そんなおにぎりは、日本人のソウルフードとも言えるでしょう。

おにぎりといっても、米、具材、塩、海苔などの食材のほか、米の炊き方、塩加減、巻き方、握り方など、地域や家庭によって独自の発展を遂げ、バリエーションも豊かです。

シンプルでありながら、古くから日本人に愛され、いまなお進化しつづけるおにぎりをひもとくと、和食の歩みや日本人の食文化が見えてくるかもしれません。（注4）

「おにぎり」や「おむすび」には、日本人の心とむすびつけられる不思議な魅力がある。しかし、いざそれらの言葉の歴史を辿ろうとするとき、私たちは、「おむすび」や「おにぎり」という言葉のたどってきた道筋をほとんど理解していないことに気づかされる。食に関する言葉が無尽蔵に眠っているであろう江戸時代の俳諧資料のうち、筆者の見ることのできたものは、僅かに九牛の一毛にすぎない。その中にあって、今回わずかに、「おにぎり」と「おむすび」の差異の一端が見えてきたようにも思われるが、今後はさらに資料の範囲を広げながら「おにぎり」と「おむすび」の深掘りをこころみたい。

注

（1）『頴原退蔵著作集　第十六巻（近世語研究）』中央公論社・一九八〇、所収。

（2）二〇一四年秋の横浜市歴史博物館企画展「大おにぎり展 ― 出

土資料からみた穀物の歴史」の図録をもとに作られた書籍。

（3）同書の引用にあたっては、便宜上、一部省略したり、表記を改めたところがある。以後同書の引用にあたっては同様。

（4）https://story.ajinomoto.co.jp/history/005.html
「味の素株式会社」ホームページ　令和四年九月九日閲覧。

（二〇二二年九月十六日受理）

（もり　しろう　本学名誉教授）

※引用文献は以下の資料によった。

『日本国語大辞典　第二版』『万葉集』…ジャパンナレッジ、『境海草』『中庸姿』『花摘』…日本文学 WEB 図書館（和歌＆俳諧ライブラリー）、『糸屑集』…東京大学総合図書館蔵版本、『見花数寄』…新潟大学佐野文庫（国文学研究資料館所蔵マイクロ写真）、『鉋屑集』『伊勢俳諧長帳』『大坂みつがしら』…京都大学文学研究科図書館、『俳諧桃八仙』『俳諧連理香』…『建部綾足全集』、『齢の華』『二度のかけ』…『雲石・防長俳諧資料集』、『石海集』…『石見俳諧資料集』、『己之中集』…『古典文庫・梅室関係俳書』、『露錦句帖』『梅雨の後』『花供養』…『福井県古俳書大観』、『江戸にしき』『余花千句』『芋の子』『八題集』…『関東俳諧叢書』、『誹枕』…『日本俳書大系　談林俳諧集』、『東風流』…『東風流―宝暦俳書の翻刻と研究―』、『紅葉』…『近世俳諧の玉手箱』、『やまかつら』…『芸備俳諧資料集』、『およびごし』…『嵐牛俳諧資料集』

付記

本稿は、三菱財団人文科学研究助成（「江戸時代の古典籍に描かれた和食文化の研究」）による研究成果の一部である。